氏　　名	星野　麗子
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大甲第 2342 号
学位授与の日付	2022 年 9 月 28 日
学位授与の要件	文化科学研究科　比較文化学専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	中国四川の客家の創出に関する文化人類学的研究――成都市龍泉驛区洛帯鎮における儀礼と慣習の分析から――
論 文 審 査 委 員	主　査　　野林　厚志 地域文化学専攻　教授 南　真木人 比較文化学専攻　教授 奈良　雅史 地域文化学専攻　准教授 小林　宏至 山口大学　人文学部　准教授 横山　廣子 総合研究大学院大学／国立民族学博物館 名誉教授

（様式３）

博士論文の要旨

氏　　名　星野　麗子

論文題目　中国四川の客家の創出に関する文化人類学的研究
——成都市龍泉驛区洛帯鎮における儀礼と慣習の分析から——

要旨

本研究の目的は、中国四川省成都市龍泉驛区洛帯鎮における儀礼と慣習の分析から、中国四川の客家の創出のプロセスを明らかにすることである。そのために、2014 年から 2020 年までの間に、成都市龍泉驛区洛帯鎮を中心に継続的に現地フィールド調査を行った。本論文は、序章と終章を含めた 7 章で構成される。

序章では、本研究の目的および先行研究の整理、本研究の位置づけと課題、調査の対象と手法、論文の構成を述べる。まず客家に関わる先行研究を 3 つの時代区分に整理して分析した。これにより、客家の人びとが黄河中流域の中原から歴史的に移動してきたといった研究がある一方で、移住先とされる現地社会に根差した客家の人びとを論じた研究があるという、2 つの流れを指摘した。そして、両者の相互関係を踏まえたうえで、客家が近年創出されている現状を示し、客家アイデンティティの研究の流れの中に本研究を位置づけた。客家研究における今日の課題、具体的には、中国の客家研究における地域の偏りや、客家のアプリオリなイメージの浸透、客家アイデンティティ形成のプロセス分析に対する新たな視点の必要性の 3 点を指摘して、本研究の独自性を提示した。

第 1 章は、客家という言葉が、いつ誰によってどのように記述されてきたのかを、中国や日本での文献調査を通して考察している。欧米の宣教師によって客家と呼ばれる人びとが注目されてきた先行研究を踏まえたうえで、四川の客家に関する記述を分析した。その結果、1940 年代に「客家」という言葉が、「土広東」という言葉と併記されたり、あるいは方言や民族を意味する言葉として記述されてきたりしたことが明らかとなった。

第 2 章は、四川の客家をテーマとした観光開発が実施されている龍泉驛区洛帯鎮を対象地に、いつ誰によってどのように観光地として注目されるようになったのかを検討したうえで、現地の人びとの客家に対する語りから客家と土広東との関連を考察している。具体的には、1990 年以降帰国華僑、現地研究者や知識人らによって、四川の客家が文化の資源として注目されていった過程の中で、客家文化がさまざまな形で表象されている内容を分析した。それにより、現地の人びとが観光開発の影響のもと、客家に対するアイデンティティを意識し、強化していった過程を示した。

続く第 3 章では、鎮から村に焦点を絞り、現地研究者や知識人、マス・メディアが注目している、B 村 L 姓一族の歴史を考察している。L 姓一族は、聖なる場所とされている祠

堂を持ち、龍舞を継承している。彼らの祠堂には、19世紀に刻まれた石碑があり、また家屋の壁には、2019年に新たに造られた石碑がある。本章では、族譜資料をもとにL姓一族の系譜関係を記したうえで、祠堂の石碑と新たに造られた石碑を分析したことにより、L姓一族の移住の歴史、祖先との関係、19世紀における規則や習慣の内容などを明らかにした。結果として、19世紀の石碑には、「客家」という文字がなかったものの、当時の地方行政と深い関わりがあったことが分かった。他方で、2000年以降書かれた族譜資料や、2019年に新たに造られた祠堂の前の対聯や石碑に関しては、「客家」を強調した表象がみられたことを示した。

第4章では、年中行事の中で最も盛大に行われる、L姓一族による春分の祖先祭祀儀礼に着目して儀礼の内容を詳述している。祖先祭祀儀礼への参加者が減少傾向にあった中で、L姓一族の代表者が宗親聯誼会を組織したことにより、散居していたL姓一族の成員が次第に集まるようになっていった過程を論じた。それによって、これまで私的領域で行われていた祖先祭祀儀礼が、近年は「客家」を積極的に表象する公的領域で行われている儀礼内容へと変化していることが明らかとなった。

最後の第5章では、現地の村落社会の人びとの間で繰り返し行われる慣習について、長期フィールド調査によって得られたデータをもとに考察した。具体的には、春節、端午節、葬儀、民間医療、石敢当を取り上げた。これらは、現地研究者や知識人によって注目されてこなかった側面である。分析の結果、世代間の認識の違いによって慣習に変化が生じていたことを指摘した。現地の人びとの日常生活に焦点を当てて描写することにより、客家研究および四川の客家に関する先行研究に対して民族誌のデータを補足することができた。

本研究で明らかとなったのは、次の3点である。第1に、客家をめぐる記述の変化とそれに伴う社会的影響である。20世紀中葉までは、土広東や客族、客家民族などとカテゴライズされていた人びとが、1990年代以降観光開発の影響下で一貫して客家と記述されるようになったことで、他の客家地域との集団的、文化的共通点として、客家の意味が洛帯鎮を中心に浸透していった過程を明らかにした。第2に、観光開発にともなう客家をめぐる文化の表象である。「西部客家第一鎮」と今日称される洛帯鎮では、四川の客家に関わるさまざまな表象がみられた。これらの表象には、全く新たに作られたもの、典型的な客家イメージと現地の文化が融合する形で表象されたもの、現地に浸透している慣習などが客家の文化として転換されたものという文化の表象に関わる3つのパターンが明らかとなった。第3に、現地の村人の日常生活における慣習の変化である。既存研究では「客家らしさ」に焦点が当てられ、その他の側面は等閑視されてきた傾向にあった。それに対し本研究では、長期フィールド調査での観察で見られた現地の人びとの日常的営為を描写したことにより、慣習の変化の内容を具体的に明らかにすることができた。

以上のように、本論文ではこれまで客家がいつ誰によってどのように書かれてきたのかといった歴史的過程と、現地での観光開発の動向を踏まえたうえで、村落社会での歴史や

祖先祭祀儀礼の様子、現地の人びとの日常生活を同時に研究対象として多角的に考察したことにより、これまでの四川の客家の研究に対し、新たな民族誌データを提示した。また、あまり知られることのなかった四川の客家が、研究者や海外客家ネットワークなどと連携して形成されてきたメカニズムを解明した。

洛帯鎮の人びとの民族誌的記述を通して、四川の客家の多層性を解明したことで、客家の創出に関する文化人類学的研究の展開に新たな一歩を踏み出していくことができると考えられる。

Form8・Separate Sheet
（様式８・別紙１）

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名　　星野　麗子

Title
論文題目　中国四川の客家の創出に関する文化人類学的研究――成都市龍泉驛区洛帯鎮における儀礼と慣習の分析から――

本論文の目的は、中国四川省の客家を対象とし、客家という意識がどのように地域社会に浸透し、人びとのアイデンティティに影響を与えたかを明らかにすることである。客家とは、漢民族を構成する一集団であるが、そのエスニックグループとしての形成や分布、文化的特徴、集団意識が注目され、研究が蓄積されてきた。四川省客家の研究は、近年の観光開発や政府の文化政策の影響を受け、その動態が注目されてきたにもかかわらず、中国東南部などにくらべて、フィールドワークにもとづき現地の状況を詳細に分析した文化人類学的な研究が手薄であった。申請者である星野は、四川省成都市洛帯鎮の「土広東」と自称してきた人びとを対象に、1990 年代から進む客家文化を用いた観光地化、客家文化の表象、客家研究拠点の設立、客家の組織化と世界客家大会の招致など、客家なるものが創出されるプロセスを、長期間にわたるフィールドワークで調査し、明らかにした。

本論文は序章と終章を含めた全７章で構成されている。序章では研究の目的を示し、先行研究の整理を通して、これまでの客家研究の地域的な偏り、アプリオリな客家イメージから脱却する必要性が批判的に論証され、本研究の中心となるアイデンティティ形成のプロセス分析の重要性が説かれる。第１章では、欧米のキリスト教宣教師によって客家と呼ばれた人びとが注目されてきた先行研究をふまえ、1940 年代に「客家」と「土広東」という言葉が方言や民族集団を意味する言葉として併記されてきたことを明らかにした。第２章から第５章は現地調査で得られた民族誌データにもとづき、観光開発や外部からもたらされた種々の変化によって、客家としての文化表象の選択が進展していること（第２章）、研究者や当該地域に特別の関心を抱いた個人、マス・メディアが注目した有力な一族の系譜ならびに祖先祭祀活動が経年変化し、自らの出自に対して客家意識が顕在化していること（第３章、第４章）、地域社会で継承されてきた年中行事や民間医療等の実践では、「土広東」と客家を必ずしも弁別せず曖昧性を保ちながら暮らしていること（第５章）を論証した。終章では、各章の議論をふまえたうえで、研究者や当該地域に特別の関心を抱いた個人の活動、政策の変化、国際的な広がりを持つ客家組織との交流、観光経済活動のなかで、現地の人びとのアイデンティティのあり方が変化していることを「客家」の創出として結論づけた。

本論文の優れた点の１つは、これまで焦点があまり当てられて来なかった四川省客家を取り上げ、地域的な偏りのあった客家研究の相対化を試みたことである。海外移住先や広東省、福建省における「客家であること」を前提とした、客家アイデンティティの形成に関する従来の研究では、元来の居住地を離れた人びとが、移住地の新たな環境において客家としての我々意識を獲得していくプロセスが注目されてきた。それに対して本論文では、

当事者の移動が契機となったのではなく、外部からもたらされた種々の変化によって、客家としての文化表象の選択が進展することが、具体的な民族誌データの分析から明快に示されている。これは、客家のエスニシティのありかたが新たな局面に移行しつつあるということも如実に示しており、現代中国の社会状況を考察する手がかりを提供するとともに、その重層性や流動性、可塑性を巡って議論がなされてきたエスニシティ論に対しても一定の貢献を果たしたと言える。

また、ある特定の親族集団を中心とした祭祀が、村落、鎮政府などの資金や資源が利用され、「客家」というアイデンティティを強化するかたちに再構成されるプロセスの検証を通して、現在の中国社会におけるエスニックグループの文化がいかに構築されつつあるのかを的確に示した。これは客家にとどまらず、広く現代中国における民族的文化のゆくへを示す洞察となっている。

一方で、対象とした一族や地域の歴史を遡り、近年の変化の議論へと繋げようとしているが、歴史的分析に関しては掘り下げが足りず、当該地域の「客家」とされる人びとの歴史的輪郭を描く作業が尽くされたとは言えない。また、異なる人びとの語りや実践から描くことや、事例を複数の文脈に位置づけて分析することで、より綿密な議論が行えた部分も散見される。加えて、各章で論じたことが客家研究だけでなく、エスニシティ研究やアイデンティティ研究、文化人類学的な開発研究の議論とどのように接合可能かについても論じる余地は残されていたであろう。

とはいえ、本研究で申請者が調査・分析したデータは多岐におよび、民族誌的な情報の大量な蓄積が果たされている。また、従前にあげた課題については、申請者は公開発表会における審査委員会からの質問に対して的確に回答しており、研究をさらに掘り下げていくための基盤は築かれたと判断できる。

これまで議論が深められてこなかった四川省客家のエスニシティが創造される現場に居合わせた好機を捉え、客家の創出プロセスを分析した本論文は、海外との交流、政治経済的な背景、線的なネットワークから面的な地域社会への移行、という中国の 21 世紀におけるエスニックグループの在りようを論じた文化人類学の研究成果として、博士の学位を授与するに値すると審査委員全員一致で判断するものである。